中等教育研究開発室年報　第 33 号（2020 年 3 月 31 日発行）別冊電子版
2019 年度　授業実践事例

保健体育科　高等学校第Ⅱ学年

ブラインドサッカー（パラスポーツ）

授業者　重元　賢史・橋本　直子

（教育研究大会　公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 保健体育科（体育） 学習指導案

指導者　重元　賢史　　橋本　直子

日　　時　令和元年 11 月 29 日（金） 第 2 限 10:40～11:30

場　　所　体育館

学年・組　高等学校Ⅱ年　パラスポーツ選択者　40 名のうち 22 名　（男子 16 名　女子 6 名）

単　　元　パラスポーツ　（ブラインドサッカー）

目　　標　1. パラスポーツの発祥の歴史を知り，パラスポーツを実際に体験することで障がい者スポーツの「支える」視点に立った関わりができるようになる。
2. パラスポーツへの理解を深めると共に，各競技のスキルの高さを学ぶ。
3. 各スポーツのルールを理解し，競技の運営に寄与できる能力と態度を身につける。

指導計画（全 13 時間）

第一次	オリエンテーション・パラスポーツの認知状況把握	1 時間	
第二次	ボッチャ（室内用ペタンクを用いて）	3 時間	
第三次	シッティングバレー	2 時間	
第四次	サウンドテーブルテニス	2 時間	
第五次	ブラインドサッカーとアンプティサッカーの体験	1 時間	
第六次	ブラインドサッカーを掘り下げてみよう	4 時間	（本時はその 4）

※　第六次については，アンプティサッカーのグループ（18 名）も同様に実施。

授業について

本校では，2 学期スタートの 8 月末から 10 月中旬までの約 15 時間で，高等学校第二学年を対象に選択制授業を実施している。その中で，昨年度より新たに『パラスポーツ』を体験するコースを設けた。これは，平成 30 年 3 月の学習指導要領の改訂と 2020 東京オリンピック・パラリンピックの開催を踏まえ，新たな視点での体育の在り方を模索するものである。

今年度，対象学年である生徒たちの一部は，修学旅行でパラリンピックに出場する車いすテニスの選手の姿を直接「みる」チャンスを得た。修学旅行当日はもちろんのこと，今回の授業で，事前に自分たちがパラスポーツを知り，体験し，みることができることは大変意義深いと考えている。今回の対象生徒たちは，全て第 1 希望でパラスポーツを選択しており，授業開始時から興味・関心が特に強く，オリエンテーションの時点から積極的に情報をキャッチしようとする姿勢がみられた。また，活動する内容に応じてグループを形成する際にも，男女分け隔てなく集えるフレンドリーな雰囲気が感じられる。

本単元では，学習指導要領に掲げる 4 つの視点「みる」「する」「支える」「知る」のうち，特に「知る」と「する」を焦点化して学習計画を立てた。授業の流れとして，それぞれの競技を行う前には，その競技の歴史や特性，競技の運営や技能について映像を踏まえながら学んだ後，実際に自分たちで体験する形式をとっている。

指導にあたって，パラスポーツの運営と普及を目指した「支える」の視点からの定着を図ると共に，今年度は特に，ブラインドサッカーを「視覚障がいのある人が行うスポーツ」ではなく，「視覚情報を遮断したことにより生まれたアダプテッドスポーツ」として，生徒たちにスキル面での向上をしかけてみたい。ブラインドサッカー特有のボール操作・身体操作を学習することで何気なく見ていた選手の動きやゲーム展開の難易度を知ることになるだろう。本授業で，スポーツの見方が変わり新たな楽しさの発見につなげることでパラスポーツの普及につなげたい。

題　　目　ブラインドサッカーを通じて，視覚情報に頼らず，声を出すことや聞くこと，相手を思いやる気持ちなど，コミュニケーションの重要性に気づかせる。

本時の目標

1. ３対３のゲームを通して，ボールの音や人の声を聞いて，自分と相手との関係を考えながら，パスをつないだり，シュートを狙うことができる。
2. 課題に対してグループで協力し，気づきや発見を共有しあい，活動することができる。

本時の評価規準（観点／方法）

① ３対３のゲームを通して，ボールの音や人の声を聞いて，パスをつないだり，シュートを狙うことができている。（運動の技能／活動観察）

② 課題に対してグループで協力し，気づきや発見を共有しあい，活動しようとしている。（運動についての思考・判断／活動観察）

③ 健康や安全に留意しながら，ルールを守り，お互いに協力しあって活動することができる。（運動や安全についての知識・理解／活動観察）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
＜導入＞		
出欠点呼	○集合	・欠席者，見学者の確認
本時の説明	○本時の学習内容を把握し，課題を確認する。	・見えない状態で動くとどんな気持ちになるか，見えている人はどのように案内したらよいか考えさせる。
準備運動	○アイマスクを着用しての運動 ・ランニング，サイドステップ，スキップ	
＜展開＞		
スクエアドリブル	○四角形で作ったグリット内でドリブルを行う。	・ボールの音やコーラーの案内を聞き，指示された方向にボールを操作できているか。
1対1のゲーム	○1対1の攻防 ・相互の位置を把握し，シュートを狙う。	・互いの位置を声かけで確認させる。
3対3のハーフコートゲーム	○3対3のミニゲームを行う。 ・攻守交代制で行う。 ・サイドからコーラーが，ゴールの場所の指示をする。	
＜まとめ＞		
学習のまとめ	○本時の学習を振り返り ・ゲームを行う中で気づいたこと ・ブラインドサッカーを通して感じたこと	・気づきを共有することができているか。
準備物：ブラインド用サッカーボール（10 個）・簡易ゴール・ホワイトボード・アイマスク・マーカー		

実践上の留意点

1.授業説明

本授業では，授業対象生徒を男子に限定した。これは，競技によっては男女別の授業が必要になり，特に視覚情報を遮断する場合は，身体接触への配慮は必要であると考えたからである。実際，ブラインドサッカーの授業の 5 時間のうち，2 時間目までは女子も一緒に混合する形で授業を展開していた。指差し確認，パス交換あたりまでは女子生徒も一緒に活動できていたが，1 対 1 等のゲーム形式での対戦型の場面で，不用意な身体接触の可能性があったために男女別の活動を行った。ブラインドサッカーのようにパラスポーツの中でも身体接触を伴う競技については，課題が多いと考える。また競技によっての男女別の授業が必要になるが，ボッチャやシッティングバレーのように男女共習かつ誰もが失敗を恐れず，果敢に挑戦できるパラスポーツから単元計画を立てることで障がい者理解の促進や生徒の意欲を向上させることができると考える。

ブラインドサッカー特有のボール操作・身体操作を学習することで何気なく見ていた選手の動きやゲーム展開の難易度を知ることができていたのではないか。本授業で，今後のスポーツの見方が変わり新たな楽しさの発見につなげることでパラスポーツの普及につなげたい。また今回のパラスポーツの実践を通して，障がい者理解だけでなく，実際に競技していく中で，誰もが楽しめるルールを考えたり，またスポーツだけでなく，社会のしくみについて問題提起するなど生徒らがパラスポーツから学んだことは多かったのではないだろうか。生徒の感想にもあったように，パラスポーツ体験は学びの意義は大きく，学校教育において今後とも教材化が進められていくべきだろう。

2.研究協議から

・授業の中で安全面での配慮をどのようにして行いましたか？
　→物への衝突を防ぐために，主にゲーム中は壁を人で築いた。
　　相手にぶつかりそうになった場合は，自発的に声を出して自分の位置を知らせた。
・授業の中でなぜ笛を吹かなかったのですか？
　→ボール以外の音が入ると集中することが難しいため
・パラスポーツとこれまでのスポーツとで，指導している中で生徒の反応どうでしたか？
　→運動が苦手という生徒も選択しており，パラスポーツが初体験という生徒がほとんどで，同じスタートラインでスタートできている分，不安に感じている生徒が少なかった。
・パラスポーツを行う上で，種目の順番等の気づきはありましたか？
　→今回の授業では，まず始めに「ボッチャ」を行った。男女共習で行えるものからスタートすることで人間関係を作る意味でも順番は大きいと考える。